



巻頭言

女性研究者の“見える化”， 日本化学会では進んでいますか？

●
大坪久子 Hisako OHTSUBO

日本大学薬学部・薬学研究所 上席研究員



「女性研究者の Visibility 調査」をご存じだろうか？ 女性研究者を囲むバイアスを明らかにして彼女たちの能力の「見える化」を進めるための調査である。日本分子生物学会や日本遺伝学会等、ライフサイエンス系学会では数年前からこの調査を続けている。方法は簡単で、年会登録時に、一般講演者、シンポジウム/ワークショップ講演者、そしてシンポジウム/ワークショップのオーガナイザーの女性比率を測定するだけである。シンポジウムやワークショップのオーガナイザーに名乗りを上げる、あるいは講演者として招待される女性研究者を「Visible, すなわちリーダーシップを発揮する研究者」と定義し、その比率を一般講演者の女性比率と比較する。実は女性会員の多い分子生物学会でも、上記三者の間には驚くほどの差が見られた。日本分子生物学会の年会における一般講演者の女性比率は30%弱、シンポジウム/ワークショップ講演者の女性比率はその半分以下、オーガナイザーとなるとさらに低いのが実情である¹⁾。果たして化学会の女性研究者の Visibility はどのようになっているだろうか？

さて、この調査で面白いことがわかってきた。シンポジウムのオーガナイザーが男性ばかりのときには講演者に女性が選ばれる割合は低く（10%）、オーガナイザーに1人でも女性が入れば、講演者の女性比率は格段に上がる（32%）という発見である。この結果は「選ぶ側に女性がいないと女性が選ばれにくい」という典型的なバイアスの存在を示している。このバイアスはシンポジウムやワークショップの講演者の選出だけに限ったことではない。学会や大学の運営で指導的立場にある理事職にも複数の女性の登用が望まれる理由はここにある。

ここで女性の側について少し考えてみよう。最近 IBM のある方から興味ある話をうかがった。IBM では「馬に乗ったら絶対降りるな」という「申し送り」が代々の女性幹部候補生に伝わっているそうだ。しかし、自分から馬に飛び乗って疾駆する女性と背中を押されて一抹の不安を抱きながらも馬に乗る女性の比率はほぼ半々、しかも馬に乗ったあとはどちらも遜色なく活躍することだ。ヒントはここにある。女性研究者の能力を最大限に発揮するには、何と言っても彼女たちを馬の背中に押し上げて「さあ、走って見ろよ」と励ます名伯楽こそ必要なのだ。化学会は女性会員が少ない。男女共同参画学協会連絡会の調査（2013年）では一般会員の女性比率は11%、調査開始の2005年以来見事に横ばいである。しかし、化学会には名伯楽はたくさんおられるはずである。優れた女性研究者を育てた名伯楽を「見える化」するために、日本化学会版 HeForShe 賞²⁾ を創設されることをお勧めしたい。その試みは、間違いなく女性会員を増やすはずである。

1) 大坪久子, 解剖学雑誌 2013, 88, 51.

2) 国立大学協会ホームページ, <http://www.janu.jp/news/whatsnew/20150723-wnew-heforshe.html>, <http://www.heforshe.org/impact/>